

書籍紹介

『サウジアラビア―「イスラーム世界の盟主」の正体』

高尾賢一郎 著

中公新書、2021年11月25日、820円＋税

ISBN978-4-12-102670-5

本書の著者は同志社大学大学院で博士（神学）の学位を取り、宗教学やイスラーム社会研究の専門家として、在サウジアラビア日本国大使館専門調査員を務めた経験を持ち、現在は中東調査会の研究員として研究活動をしている。そのためにサウジアラビア研究においても、現地で暮らす経験持つ著者には、研究職にあっても短期滞在しかできない人々に比して有利な情報が多く集積していたことを期待させる。地域の独自性や住人の生活意識、表面的ではない独自の文化などを分析した重厚な研究が期待される。

しかし、重厚な研究とは行かず、本書は著者の意図とおりに、比較的簡便な頁数で簡潔で読みやすい著作となっている。一般向けにはこれで十分であると思われるが、これでは読者に正しいサウジアラビアの姿を理解させることができるだろうか。研究者としてサウジアラビアに暮らす機会を与えられた著者には、新しい視点と深い分析による重厚な研究が期待されていたのではないだろうか。

もともとサウジアラビアには国の情報が外へ漏れることを極端に嫌う体質がある。その情報が国家の政治や経済に関するものである場合は言うまでもなく、個人的な日常生活に関するものであっても、きわめて神経質に対応する。しかし、このような日常的な秘密主義については、よく知られていることであり、サウジアラビアの事情を周知している人は誰も驚かない。

著者の名誉のために言っておくと、1932年になって、一般の王国という体制からは想像がつかない、サウジアラビア王国という稀有な国家が成立した過程については、本書ではよくまとまっている。著者は、サウジアラビアが、イスラーム法学の中でも最も厳格な典拠

主義のワッハブ派のイスラーム法学を奉じる国家として、近代化を模索しつつも、原点を固守する現代の王室の在り方や、意欲的なばかりに周囲に問題を興して回る現皇太子の整合性に欠けた活動に至るまで、重要な点を逃さずに記述している。

その一方で、わかりにくいといわれるサウジアラビアの全体像について、西洋近代の政治思想と対比して論じる点については、かなりの違和感を禁じ得ない。この点を改善し、イスラーム政治思想の観点から丁寧な分析を行えば、「サウジアラビアとはどんな国？」という問題については、誤解なく読みやすい良書となるであろう。このままでは、西洋近代と比べて、やはり訳の分からない国、後進的な国家、原油や天然資源があるうちはいいけれど、そのうち、資源の枯渇と同時に終わってしまいそうな国になって、その存続が怪しまれるという理解になってしまう。これでは日本人の眼には、いつまでたってもサウジアラビは「時代遅れの変な国」のままであろう。

改良点としては、サウジアラビアの政治思想と対比する政治思想について西洋政治思想を優位に配置することをせず、イスラームの他の政治思想や国際法などとも対比して、新たな構図での研究を期待したい。なぜなら、反近代主義のように西洋近代の価値観には、すでに破滅している思考が多く、新たな近代思想やリベラリズムの構築が求められている現代にふさわしい方法で、サウジアラビアの諸問題を、次の課題としてより掘り下げて、研究していただきたいと願うものである。

(紹介者：塩尻和子)



『戦争・革命・テロの連鎖—中東危機を読む』

川上泰徳著

彩流社、2022年3月25日、2200円＋税、

ISBN987-4-7791-2817-2

本書の著者、川上泰徳氏は1981年に朝日新聞社に入社し、中東アフリカ総局員、同総局長などを歴任し、中東駐在編集委員を最後に2015年に退社し、退社後はエジプトに取材拠点を置いてフリーランスのジャーナリストとして活躍している。2002年度のボーン・上田記念国際記者賞を受章した気鋭の記者である。

長年の中東地域での取材活動から多くの著書を出版しているが、その中でも本書は著者が新聞記者になって以降今日までの中東で発生した大きな事件を時系列的に取りまとめ、その相互関係を検討したものである。そして、その作業から、「中東では10年ごとに重大な危機が繰り返される」と結論づけている。

その最初の事件は1979年のイラン革命であるが、この事件は著者が新聞社に入社する前年に起きている。本書で最も新しい事件とされているのが2017年イスラーム国（IS）であり、それには昨年8月のターリバーンのカーブル奪回が続くが、この件は本文では触れられていない。しかし、本書の最後に6頁にわたって1947年の国連パレスチナ分割決議からターリバーンのカーブル制圧まで丁寧な年表が添付されていて、事件の時系列について分かりやすい。

その「10年ごとの危機」とは、先に見た1979年のイラン革命で、それに2003年のイラク戦争、2011年のいわゆる「アラブの春」が続く。

イラン革命の年にはサウジアラビアの聖地マッカの占領事件、ソ連のアフガニスタン侵攻、翌80年にイラン・イラク戦争が勃発し、81年にはエジプトのサーダート大統領が暗殺されている。

このように、「10年ごとに繰り返される」としても、その間には何も起こっていないということではない。著者は、それぞれの事件

の合間の関連性にも的確に検証を進めている点から、情報の確実さ、分析の丁寧さが見える。さらに、複雑な政治的背景を語りながらも、分かりやすく解説している点など、戦争やテロを扱った著作にしては、読みやすい著作であり、随所に著者の苦心が見えてくる。

本書に信頼感があるのは、何よりも著者が「現場」に駆けつけているからである。実際に自分の眼で見て、群衆と一緒に行動し、時には危険な目にも会いながらも逃げずに、五感を研ぎ澄まして取材した成果がまとめられているからである。

悲惨な事件も読みやすく、理解しやすいように工夫を凝らしてある点から、普段は中東の戦争やテロの話には触れたくないと思う人たちにも、ぜひ読んで理解してほしいと勧めたくなる。昨今のロシアによるウクライナ侵攻のニュースを見るたびに、この世界が突然変化してしまうこともあると思わされてしまうが、世界の変化に対して、少しでも学ぶことが重要であるとするれば、本書はその予防策の一つにもなるであろう。

著者は最後に中東では新型コロナ・ウイルスによる感染予防と対になって治安対策が強化される問題を挙げている。現状ではどの国も、コロナ対策には有効な手段が出てこないが、コロナ対策が新しい政治的矛盾を生む可能性を著者が案じている点にも、同感する。

(紹介者：塩尻和子)

